

2020/11/22 降臨節前主日（特定 29）
東京聖三一教会 マタイ 25:31-46
司祭マリア・グレイス笹森田鶴

今日は教会暦の最後の主日、つまり降臨節前主日です。この主日に他の管区では、「王なるキリスト」という名称をつけているところが多くあります。日本聖公会でも3年周期のそれぞれ毎年、キリストが王であるということについて記されている福音書が選ばれています。

今日の箇所も、栄光に輝いて天使たちを従えていらっしゃる王なるキリストのお姿が描かれています。そのキリストは王座に着かれます。そこから王としてすべての国の民を集められ、その人びとをふたつに分け、神さまの救いと裁きを宣言されます。

王としてのキリストにとって、この時の判断は非常に明確でした。羊や山羊を飼ったことのない人でも容易にそれが区別できるように、主イエスさまの目にはすべての人びとについて明らかな区別が見えています。そして右にいる人びとには「お前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」と告げ、左にいる人びとには「悪魔のために用意してある永遠の火に入れ」と告げられます。

この大きな違いは、人びとの行動にあります。右側の人びとは、王が飢え、渇き、旅をし、裸で、病気で、監獄に入れられていたときに、食べ物を与え、飲ませ、宿を貸し、着せ、見舞い、監獄に面会に行きました。けれども左側の人びとは、まったくそれをしなかったのです。

左側の人びとも自分がそんなことをしなかったかどうか分かっていませんでしたが、ここで非常に大事なポイントは、右側の人びとも同様に分かっていなかったということです。何を分かっていなかったかと言いますと、それが王だとは分からなかったのです。

王であることを知らずにいたということは、

王らしくなかったということと同時に、右側の人にとって、その行動は自分の得になると思ってとったものではなかったということが分かります。王だと分かっていたら、もしかしたら右側の人であっても、終末に救ってくれるかもしれないと期待してしまうかも知れません。

けれども右側の人びとには全くそのような期待はありませんでした。主イエスさまご自身が目の前の人びとに深く憐れまれ、はらわたを痛み、共感して、いやして下さったり、祈って下さったり、食べさせて下さったり、自分には何の得もないけれども必要なことをして下さったこと、それと同じようなことを右側の人にしたということになります。

ですから、今日の聖書の箇所を読んで、そうか、救いにつながる行動はこのようなことなのだから、これからはそのようにしようと期待して実行したところで、それは自分勝手な願いであり、自分の救いのために人をかわいそうな人と対象化して、救われたい自分を人に押し付けていることになります。

神さまが声も出せずにエジプトの地で奴隷となつて叫んでいたイスラエルの民を深く憐れまれ、エジプト脱出を実現して下さったように、右側の人びとは目の前の人びとに深く思いを寄せた、そのことがこの聖書の箇所の大事なことです。その時困っている人に、悲しんでいる人に、飢えている人に、孤独な人に心を痛めて何かをすること、ただそれだけが終末に起こる神さまの救いへとつながる行為だったのです。

この時、これらの行動を総じて使われている言葉は、「お世話をする」という言葉です。これはディアコネオーというギリシャ語で、もともと「食卓で世話をする」という意味の言葉です。人と人との間において、相手の利益や良きことのために奉仕するという意味の言葉です。マタイ8章でペトロのしゅうとめが、熱が下がった後に主イエスさまを「もて

なした」というのも、この言葉が用いられています。

そして聖書や教会では、この言葉は、主イエスさまの言葉と行為に方向づけられているもの、信徒としての態度、慈恵の働きへとつながる言葉として大事な意味を持っています。三聖職位のひとつである「執事」のもとの言葉です。

このディアコネオーの行為や姿が、わたしたちの王であるキリストの姿です。同時にキリストはご自分を最も小さい者、些細な者、と同一視されます。ユダヤ教の指導者たちや、むしろ教会の中で、あえて無視されがちな存在の人びとへ、キリストは終末に向けて目を留め続けていることを今日の福音書は伝えるのです。

わたしたちの王は、みすぼらしいのです。

わたしたちの王は、飢え渴いています。

わたしたちの王は、病を負って苦しんでいます。

わたしたちの王は、住む所なく旅をし続けています。

わたしたちの王は、牢につながれています。

終末とは、そのような人びとがまことに解放され、そのような人びとやともにいる人びとが神の国に入れられる時です。いつやってくるか分からないその時に生じるのは、決して恐ろしい裁きの出来事だけではなく、神さまの慈愛による大いなる救いが実現します。それがわたしたちにとってのよき知らせです。

教会暦の最後の主日、わたしたちの道筋がどこに向かっていくべきなのかを示す聖書箇所が選ばれ、一年を締めくくります。そのことを心に留め、来週から始まる新しい一年、降臨節へと聖霊の導きのままにご一緒に歩んで参りましょう。